現代作家

掌編小說集

下

現代作家掌編小説集　下

現代作家掌編小説集　下

初版発行　昭和四十九年八月八日

編集発行人　白井達男

発行所　株式会社朝日ソノラマ

郵便番号一〇四　東京都中央区銀座四丁目二番六号
電話　東京（五六三）六〇二〇　振替　東京四〇三二

印刷所　凸版印刷株式会社

定価　一二〇〇円

落丁、乱丁本はお取り替え致します。

現代作家掌編小説集　下

目次

見知らぬ人　澤野久雄　5
遺書　津村節子　17
置き忘れ　川上宗薫　27
新らしい牛乳屋　曽野綾子　37
鯖浦の長い日　井上光晴　49
鳳仙花　水上勉　61
犬のいる風景　伊藤桂一　71
若い母　三浦朱門　83
ある殺意　渡辺淳一　95
あげは　坂上弘　107
月影　小田嶽夫　119
長寿島　李恢成　129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

謀殺　杉本苑子　139
冷たい仕事　黒井千次　151
怒りすぎる　杉森久英　161
ひげの生えた赤ん坊　結城昌治　173
飯たき　北畠八穂　185
将軍マックの死　村上兵衛　199
猫　長部日出雄　211
早い結婚　鈴木俊平　223
黒豆の煮える音　中村武志　233
素足の少女　富島健夫　245
三本脚　川崎長太郎　257
閣下　阿部昭　267

北国への旅　田村泰次郎　277
義民顕彰式　杉浦明平　289
地蔵　和田傳　301
永興小学校の思い出　後藤明生　311
ある失踪　夏樹静子　321
途中下車　森村誠一　333
むかしばなし　小松左京　345
解説—執筆作家のプロフィル　巌谷大四　357

装幀　原田維夫

見知らぬ人

澤野久雄

伊川には一度だけ、髪を染めた経験がある。四十代のなかばを、過ぎたころのことだ。
お濠端の大きなホテルに泊っていて、ある日、地下の理髪室へ行った。鏡の前の椅子に坐らされて、なんとなく眠たいような数十分がたった時、
「お客さま、髪をお染めになりませんか」
不意にそう言われて目を開くと、鏡の中の理髪師が、格好のねたを前にした料理人の顔をしていて、
「お客様の白髪はとてもきれいですけれど、まだお若いんですから……。お染めになれば、きっと見違えるほど若くなります」
「そりゃ、この白髪を染めれば、たしかに若くは見えるだろうな」
実際、それは白すぎる髪なのである。
白くなりはじめたのは、学生時代のことで、三十になった頃には、すでに八分通りまで白かった。三十四、五になると、もう真白であった。髪の白さのためには、随分、さまざまな目に会っている。
仕事の都合で関西から移って来て、湘南大磯に住んだ時、彼の髪は忽ち近隣の話題になった。
「今度越して来た伊川という人、いい年をしてお妾さんと住んでいるの？」
そのとき彼は三十五歳だったが、はじめて会う人の目には、彼の白髪だけが映るのだろう。何度か顔を合せていれば、彼等の想像する伊川の年齢も、少しずつ本当の年に近づいて来るのだが、最

初は彼の現実の年よりも、二十歳も上に見えるらしい。ところが彼の妻は、どちらかといえば若く見える方だ。すると夫婦の年齢は、二十何歳も開いて見えることになる。世間なみの夫婦としては、どうしても釣合いがとれないのだろう。

妻の八重は隣家の主婦から、こういう挨拶を受けたことがある。

「御隠居さんをしばらくお見かけしませんが、御元気でいらっしゃいますか」

伊川の家族といえば、夫婦と一人娘の未知だけである。八重は一瞬、相手が何を訊ねたのか合点がゆかず、ふと当惑した顔になった。やがて、いくらか紅くなりながら、

「あら、宅には御隠居さんは居りませんの。あれは、あたしの主人ですわ」

相手は、狼狽した。その場の収拾のしようもなかったのだろう。口の中で何か呟くように言うと、身を翻して自分の家に逃げ込んでしまったという。

その程度のことなら、笑い話ですむ。しかし九歳になる娘の未知が、世間から心ない言葉を浴びせられるとなると、笑い話ではすまない。彼女はある日、友達の家へ遊びに行って帰って来ると、

「あたしは、お父さんの子なの？　それとも、お母さんの子なの？」

何を言い出したのかと、八重が笑って相手になってやると、娘は一向に納得しようとしない。それどころか、母親を詰問する口調である。八重も、開き直った。すると娘が言うには、

「お宅のお父様とお母様は、随分、年がちがうのね。あなたは、どちらのお子さん……？」

友達の母親から、そう訊ねられたという。つまり伊川たちは再婚で、未知は伊川の先妻の子か、

それとも八重の連れ子なのかという質問なのだ。

この時ばかりは、八重も怒った。自分が二号さんかと疑われ、夫が隠居の身かと見誤られるぐらいなら、実害はない。しかし、年端もゆかぬ娘に、父か母かが違うのではないかという疑問を抱かせる、こうなれば、一種の迫害である。もとはといえば伊川の白髪のために、夫婦の年齢が極端に開いて見えるからなのだが、——八重は娘を鏡台の前に連れて行って坐らせると、その目と眉とが、どんなに父親に似ているか、またその鼻と口の形が、どんなに母親似であるかを、何十分もかかって説明したという。

伊川は自分自身では、別に髪の白さを苦にすることはなかった。他人は勝手に白いと決めつけるが、この白は日により時により、様々に変色するのである。ひどく健康である時、心もすがすがしいような日は、たしかに銀髪と言っても差支えない白さである。それが時によると、影のように薄黒さが射す。疲れている日、屈託のある日は、僅かに褐色を帯びる。どういうわけか、ひとつまみほどが、奇麗なブロンドに変ることがある。しかし徹夜で仕事をした朝は、前の方だけが茶色に汚れる。これはあとになって分ったことだが、彼は机に向って仕事をしながら、火をつけた煙草を、左手の指で支えている時間が多い。その煙が立ち上って、彼の前髪にまつわりつく。一晩、断続的にそういう状態を続けていると、髪は前の方だけが、煙草のやにで染るのである。尤もこれは、洗えば落ちる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とはいえ、こういう髪の生態も、平常の伊川は知識として知っているだけである。それが話題にでもならない限り、髪の白さを意識することはなかった。自分の髪を見るということは、滅多にないことだったからだ。なるほど、朝、顔を洗う時、洗面所の鏡に映る顔をちらと覗くことはある。髭をあたる時には、何分間かは鏡の中を見ている。しかし目に映っているのは、顔の一部分だけだ。注意して、髪を見ることはなかった。髪が白いことは、彼にとっては常態なのである。ある日、その髪が突然、漆黒にでも変っていたら、おそらく彼も愕いて目を惹かれたにちがいない。

しかしそのような状態が、更に五年、十年と続く内に、彼の中には秘かな変化が起って来た。白髪が、目立ちすぎると思い出したのである。

これは、仕方のないことであった。彼の書くものが、ようやく売れるようになって来たのである。彼は、それまで勤めていた会社を辞めた。二十年の余も勤めをしたあとだから、ひどく自由になった気がした。不意に、解放されたようである。

ところが、現実はちがっていた。

一度でも会ったことのある人は、彼の白髪を決して忘れなかった。また、一度も会ったことのない人でも、道ですれちがいながら、あ、あれは伊川だ、と気づくことがあるようだった。多分、雑誌か何かで、彼の写真でも見ているのであろう。こういう現象は、彼の中に思いがけない疲労を呼んだ。

たとえば、女の子を連れて町を歩いたとする。すると、たちまち反響は戻って来るのである。友

人は、お前、二、三日前、若い娘を連れて歩いていただろう、と言う。もう大学へ通うようになっている娘の未知が、あなたのお父さん、この間、奇麗な人とお茶を飲んでいたわ、と友達に教えられて帰って来る。実際、どこで、誰に見られていないとも限らないのである。彼は外を歩く時、いつも何ものかに対して、無意識のうちに警戒しているようになった。娘は、

「お父さん、お気をつけなさい。お父さんは目立つんですから……」

と言う。

彼がふと、一人の女を愛するようになった時、娘は言ったものだ。

「お父さん、銀座なんかで女の人と食事をしていたら駄目よ。すぐに見つかるわ」

彼が愛した女は、彼より五つほど若かった。離婚した人で、自分の手で高校一年生の娘を育てていた。

この人は、彼とのつき合いが始った最初から、

「あなたと町を歩くことは、危険ですわ。とにかくあなたの髪は、暗闇の中でも光るんですもの」

それは、彼も知っていた。いつだったか、映画館の椅子に坐ってスクリーンに溺れ込んでいる時、不意に肩を叩かれたことがある。おどろいて振り返ると、友人が一人、笑って立っていた。彼は、やあと肯いて、しかしこの暗闇で僕のことがよく分ったな、と言った。すると相手は声をひそめて、君の髪は、入口のドアを入って来た途端に、真先に目についたよ。相手は何気なく、真実を言っただけであろう。しかし彼は唐突に、逃げても逃げても二六時ちゅう誰かに追われ続けてい

る、犯罪者の恐怖を思いうかべるのだった。ちょうどスクリーンで、殺人が行われようとしているところだったせいかもしれない。

しかし女を愛したら、会わないわけには行かない。彼はその女に言った。

「町を歩く時は、よその人の顔を見ないようにしなさい」

「あら、こちらが見なければ、相手の人にもこちらが見えないと思っていらっしゃるの？」

彼女は声もなく笑って、誰も、知ってる人のいない所へ行きたいわ。誰も、あなたの顔を知らないような山の中の静かなところ。でも、そんな所でたまたまあなたの知っている人に出会ったら、それこそもう決定的ね。

伊川がホテルの理髪室で、髪を染めてもらったのは、そういう時分のことであった。

黒い髪の男を目の前の鏡の中に発見した時、彼は自分の魂が、いままで住んでいた人間を見捨てて、突然、別の男の肉体に宿ったと思った。四十何年にわたる伊川の歴史は、目をつぶっている内に消滅してしまった。その時から伊川は、いままでとは違う若い男になってしまったのである。この認識は、伊川にとってある種の戦慄を含んでいた。部屋に帰ると、落ちつかなかった。仕事が、手につかない。

彼は、町へ出てみようと思った。

外出用の服に着がえると、ホテルの前でタクシーを拾った。髪の黒い俺を見たら、あの女はなん

と言うだろう、と思った。しかし彼女は、旅行中であった。郷里に用事が出来て、帰っている。まだ何日間かは、会えないはずであった。

——一人でも結構。

と、口の中で呟く。お濠端をゆく車が左折し、右折し、更に日比谷で左に曲ると、彼は日劇の前で車を降りた。夕方で、雑踏している時刻である。信号が青に変るのを待ちながら、彼は誰かの視線が、執拗に彼の横顔を捉えているのを意識した。友達かな？　顔を合せば、分るかな？　彼は思い切って、ひょいと右手をふり向いた。と、そこには彼が二、三年前まで勤めていた会社の先輩が、けげんそうな顔をして彼を見ているのだった。表情を動かしてはいかん、と、彼は思った。だから彼は、むしろ怒ったような顔をして、相手を見据えた。と、相手は急に狼狽したような目を、広い道路の向う側に投げ、信号が変ると、真先に歩き出した。そして向い側の歩道に行き着くと、ちらと振り返って彼を探した。が、また視線が行き合うと、今度はちょっと首をすくめるような仕草をして、銀座の方へ向って歩き出していた。

伊川はすでに、顔の広い男であった。

数寄屋橋の交叉点を渡る時、また、一人の知人に行き会った。更に二、三十米行く内に、顔見知りの婦人記者に出会った。彼女は今までに何度も、伊川を訪ねて来たことがある。互いに、軽口も叩ける、間柄であった。しかし彼女は、一瞬、ひどく愕いた表情になった。なんと、伊川によく似た男だろう、と思ったにちがいない。あるいは、時間が逆行して、十年か二十年前、——つまり彼

女が知り合う前の伊川に、偶然、出会ったと思ったかもしれない。目も、鼻も、口も、そっくりではないか。そして髪の色だけが、すっかり違う。しかし、伊川が髪を染めるなどということは、誰にも考えられないことなのだ。時々そんな話が出ても、伊川は笑って、とり合ったことがなかった。また、それを話題にした女たちは、そのあとで必ず、やっぱり髪は、染めたりはなさらない方がいいわ、伊川さんのレッテルが失われてしまうわ。

その日の夕方、彼は銀座の表通りを歩いた。それから、裏通りを歩いた。おや、という目を投げて来た人は、何人かある。しかし、声をかけて来る人は、一人もなかった。レストランに入って、一人で食事をした。が、誰一人、彼に気づいた者はなかった。お辞儀もしないですむ。やあ、も、今日は、も要らない。これはなんという平穏なことであろうか。

その翌日から、彼は毎日、散歩に出るようになった。もっとも、知っているバアへは行かない。知っているコーヒー店にも、寄らない。ある時、街角で懇意な友達に出会ったことがある。彼は思わず、自分の方から、やあ、と言いそうになり、あわてて口を閉ざした。友達は彼の方に視線も向けずに通りすぎた。その時、彼はふと何かが胸の中へ沈んで行くような気がしたものだが、十メートルも行かない内に、彼はもうそれを忘れた。

あと一日か二日で、郷里へ帰った女が戻って来るという日の夕、彼はまた銀座通りを歩いていた。

つい先日までは、その辺りを歩いていれば、四度や五度は、人と挨拶をしなければならなかった。二度や三度は、見知らぬ人の視線を、意識しなければならない。ところがもう、世界が変ってしまっていた。誰も、彼には気づかない。彼は少しも知らぬ他国を、歩いている男と同じであった。これならば、誰にも気兼ねは要らない。何をするのも、自由である。

自分でも黒い髪を意識しなくなっていた。彼は、奇麗な婦人靴店の前にさしかかった。その時、不意にその店から飛出して来た少女が、危く彼に突当りそうになり、あわてて身をかわす、その途端に少女の顔からさっと血の気が退いた。目が、恐怖のために光り出すようであった。

「どうした……?」

と、口にしかけて、彼はあわてて口をつぐんだ。少女は、彼の愛している女の、娘だったのである。もうずっと、彼になついていた。会えば、甘える。彼も、その子を可愛がっていた。愛している人の娘だから、——というばかりでなかった。その子自身も、清潔で可愛い少女だったからである。

彼は忽ち、自分の黒い髪を思い起した。しかし、その娘を愕かしたという意識が、彼を一瞬、唖にした。少女は黒い髪の男にも、たしかに伊川を見たにちがいない。が、そこに立ち止った伊川と、いつも見ている伊川との相似が、あるいは相違が、彼女を脅やかしたにちがいなかった。どうしても、二つの顔が一つに重ならない。

ああ、という小さな悲鳴が、彼女の口を洩れた。と、次の瞬間、彼女は身を翻して走り出してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com